

会 長 方 針

道 端 進
(信用金庫)

歴史を誇る京都東ロータリークラブは、山紫水明の古都、京都の東山山麓を拠点として活動をしてまいりました。職業分類を見ても、医療・医薬、教育・研究等に携わっておられる学識者が多く、そのことが当クラブの誇りでもあります。

2006年には、創立50周年を迎えることになり、記念事業実行委員長として、「燦めく50年」というテーマのもとに、記念事業を進めております。先輩たちが築いてこられた、文字どおり“燦然と輝く”足跡を辿りつつ、次世代につなぐ、新たな飛躍のスタート台といたしたいと存じます。

加えて、石田隆一会長の後に、京都東ロータリークラブ会長を拝命することとなりました。

もとより浅学非才の身であり、重責をまっとうすることができるかどうか、自信があるわけではありません。しかし、会員歴は古く、これまで皆様から賜りましたご厚情に報いることが、自分に課せられた使命であり、これからの務めであろう、と考えて、お受けすることといたしました。何卒よろしくお願い申し上げます。

石田会長（パスト会長）は、「ロータリーを楽しもう」をテーマに、またサブテーマとして「照顧脚下」を掲げられ、足元を見直しつつロータリーの基本である、“奉仕と友情”を高めるためにリーダーシップを発揮してこられました。私は、その精神を受け継ぎつつ、テーマを「ロータリーの原点に戻ろう」、そして、サブテーマを「愛とは心」にいたしましたと思います。

「愛とは心」というのは、私の人生を貫いてきた信条ともいえるものです。人間が生きて行くうえで、最も大切なことは、感謝の心だと思います。すべてに感謝の気持を持てば、争いもなく平和であり、また他者を思いやる心が芽生え、ストレスもなくなります。感謝の念は愛を育み、人はもちろん、物にも何にでも、心からの愛をささげることが必要です。それが「愛とは心」の所以に他ならないのです。

物質文明が進んだ現代社会にあって、心の荒廃が叫ばれて久しいものがあります。老若男女を問わず、公德心は希薄になり、譲り合う心や敬う心、謙虚な心や利他の心が失われつつあります。歩きながらの飲食は言うに及ばず、車中の化粧やゴミやタバコのポイ捨て

等々、公德心欠如の事例は枚挙にいとまがありません。

幕末に、黒船がやってきて開国、明治維新、文明開化へと進んでいきますが、日本に来たアメリカ人は、日本は文明から遅れた東洋の野蛮な国であると思ってやってきました。ところが、士農工商、それぞれが分相応に暮らし、清潔で礼儀正しく、子は親を敬い、親は子を大切に思い、弟子は師を敬愛し、老人は若者に敬愛される威厳があった。それに、固有の誇り高い文化をしっかりとって暮らしているのを見て、到底日本は植民地にすることはできないと思ったようです。このように、当時の日本人の精神文化が国を救ったのです。今日、日本人の精神文化が危機的な状況にある時こそ、ロータリアンである我々が、「奉仕と友情」、「愛と心」の大切さを実践しなければならないと考えます。

ご案内のように、龍安寺には、水戸光圀寄進と伝えられる「知足」の蹲つくばいがあります。そこには、中心の「口」を共有して「吾唯足知（われただたることをする）」となる文字が彫ってあります。これこそ、今の日本人が忘れてはいけない感謝の心に他ならず、ロータリーの奉仕の精神に通じるものではないでしょうか。

会員の皆様のご支援ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。